



遙か昔、高校世界史で学んだ中世ヨーロッパは、カトリック教会が権勢を誇り、その教えに反すれば異端審問で罪を問われ、地動説を唱えたガリレオ・ガリレイに、それでも地球は回っていると云わしめ、封建領主や聖職者に初夜権という愚かな行為を認め、理不尽な魔女狩りが横行するなど、長いなが〜い暗黒の時代だったという印象が残っています。

このブログ作成を引き受けてから、いま一度、当時のことを調べてみようとして【中世とキリスト教】をキーにネット検索したところ、こんな文章を見つけました。

『一言で中世といっても、それは通常4世紀から15世紀にわたる千年以上もの長い期間をさす。中世におけるキリスト教の展開はきわめて複雑であるが、主に三つの時代に区分できよう。第1期は4世紀から10世紀にかけてで、キリスト教の伝播の時期といえる。この時期、地中海周辺に限られていたキリスト教が、アルプスを越えて全ヨーロッパに広がった。

第2期は11世紀から13世紀の最盛期で、教会の指導力が絶頂に達し、学問、建築、修道院など多岐にわたってキリスト教文化が咲き誇った時期である。

第3期は14世紀から15世紀の衰退期で、キリスト教によるヨーロッパ統一も解体に向かい始め、さらに次の宗教改革の時代につながっていく時期である』

=カトリック中央協議会 中世のキリスト教より抜粋=

今回の講義テーマは、まさしく、この第2期の時代にスポットをあてたものでした。

10世紀頃からヨーロッパの気候は温暖になり、北方からの異民族の侵攻も止み、ドイツやフランスの王朝も安定し文化が栄えるようになった。

また、この時期に、農業においては新しい農法や鉄の普及による農具が出現したことにより中世農業革

命と呼ばれるような大変革をとげた。

商品経済の以前は、土地が最大の価値を持ち、これが財産であった。11 世紀中頃からは森林を切り拓く開墾作業が盛んになり、フランスの六割以上を占めていた森林が二割まで減少。

これらにより、穀物の収穫量が飛躍的に上昇し、収穫量が増えたことで生活が安定し 人口も増加した等々、決して停滞していた時代ではないことを学びました。

けれど、当時、生活に密着し社会を律していたのはカトリック教会。

さらに世の中には世紀末思想が覆っていました。そんな中、神父は人々に、

【紀元 1000 年＝この年世界は終末を迎え、最後の審判がくだされ、地上における行為に基づき、天国で永遠の幸福を得るものと地獄で永遠の苦しみを受けるものが分けられることになる】

などと、熱く語ったのではないのでしょうか。

信仰心に篤い人々は、罪を償い天国に行きたいという願望が強くなったことは容易に想像できます。そんな中、聖遺物崇拜が隆盛に。

これは、聖者の遺体や髪の毛、衣服、持ち物などに触れるだけで罪があがなわれるというもので、救済への願望や病気の快復を願って聖遺物を安置する教会への巡礼が盛んになりました。

そんな中、スペイン北西部の果て大西洋に近いガリシア地方で、キリストの弟子の一人であった聖ヤコブ(スペイン語でサンティアゴ)の遺骸が奇跡的に見つかりました。

彼は 1 世紀頃にエルサレムで殉教して、この地に埋葬されたのち、スペインがイスラムの領土になったことなどから、長く行方不明になっていました。

【聖ヤコブの霊廟に詣れば、すべての罪が許され、天国の門が開かれる】

この地に聖ヤコブの遺骸があるため巡礼が盛んに行われ、絶えまなく巡礼者の列が続くようになり、サンティアゴは、ローマやエルサレムと並ぶキリスト三大聖地の一つになりました。

フランスからサンティアゴへ向う 4 つの巡礼路。

パリからは 1600 キロの距離です。また、いずれのコースをたどっても、高くそびえるピレネー山脈を越えなければなりません。

途中、訪れるべき各地の教会と聖遺物を参拝しながら精神的な救いを求め巡礼に向かう。一日に 20 キロ歩くとして、片道 80 日。往復 160 日を要する行程です。



ナポレオン曰く【ピレネー山脈を越えると、そこはアフリカだった】

険しい山脈を越えても荒野と乾いた気候の 800 キロの道のり。

現在のように優れたウォーキングの装備も無い時代、きれいに整備された道でもないでしょうし、晴天が続くわけもなく、風雨や酷暑について歩く道程は、厳しいものだったと思われます。

私の知人は、スペイン側の約 100 キロを巡礼するコースをツアー参加しましたが、連日の徒歩移動に、たちまち足にマメが出来る始末で、ホテルに到着するや否やバタンキューだったと…。

巡礼者は、老若男女、健常者に障がい者とさまざまなはず。

過酷な日々は、ゴールであるサンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂にたどり着くまで、何人もの病人や死者を出したのではないのでしょうか。

余談ですが、巡礼の旅において、巡礼者に水や食物を与えた場所、宿を求める人を宿泊させた巡礼教会があります。この教会で看護にあたる聖職者の無私の献身と歓待を hospitality (厚遇、歓待) と呼び、そこから今日の病院を指す hospital の語ができたと言われています。

冒頭に述べたネット検索時に、日本カミーノ・サンティアゴ友の会というNPO 法人を知りました。ここは巡礼に関する情報発信を行っています。

このHP を見ますと、中世以降の同地の様子等を記述しています。興味深いので概略を紹介します。

【…活況を示した巡礼路も、ペストや戦乱がヨーロッパを襲ったため影が差し始め、また、宗教革命後のプロテスタント諸国での巡礼や聖人崇拜の禁止などにより、サンティアゴ巡礼は次第に下火になっていきました。

さらに16世紀後半、イギリスとの戦いに敗れたスペインは、イギリス海軍の略奪を恐れた教会が、聖ヤコブの遺骸を隠したまま、その場所を失念したため、巡礼の対象を失くしたサンティアゴ巡礼の人気は凋落しました。

この行方不明になっていた遺骸は、19世紀後半になり発掘調査でようやく発見されました。時のローマ法王レオ13世がその遺骸を聖遺物と認めたことで、人々は再び聖ヤコブの墓を参拝できるようになったとか…】。

ブログを終えるに一言。聖ヤコブさんって、何度も、行方不明になる方ですネ。

記事：吉岡 英機